

平成 30 年 7 月 11 日

長岡民話の会

笑いをさそう昔話

高橋 実

柳田国男の分類 大話、真似そこない、愚か村話、
関敬吾の分類 狡猾者、おどけ者、業比べ、和尚と小僧、偶然の幸福、愚か者、
あわてもの、愚か村、愚か婿、愚か嫁、形式譚、などがある。

1、 偶然の一致と勘違い

ネズミ経

旅の偽坊様が、訪問先で婆様に読経を頼まれる。お経を知らないが、仏壇の前にネズミが出入りして、「オンチョロチョロ穴のぞき、がたりむちり逃げ出した」とお経を読む。婆様はそれがほんのお経と信じて、毎晩仏壇の前であげる。ある時、泥棒が家の中をのぞいていると、婆さまのお経が聞こえる。泥棒は自分のことが全て知られていると思って、逃げ出す。

こんにやく問答

ある寺に旅の問答僧が訪れるが、和尚は問答がわからないので、こんにやくやがでる。僧が無言の問答をはじめ、親指と人差し指で円を作る。(太陽は?) (こんにやく屋の解釈 こんにやくはこれくらいか?) こんにやくやは両手で円を作る。(こんにやく屋 いいや これくらいだ) (僧の解釈 世界を照らす) 次に僧が指 10 本を出す (十方は?) (こんにやく屋 10 文か?) こんにやく屋は 5 本出す。(こんにやく屋 5 文だ) (5 戒で保つ) 僧が指三本を出す (三千世界は?) (こんにやくや解釈 3 文にまけろ) こんにやく屋はあかんべえする。(こんにやく屋の解釈 いやだ) (眼中にあり) 僧はこんにやく屋に負けて、こんな偉い人にあつたことが無いと帰ってゆく。「日本昔話事典」

ふるやのもり

この世で一番おつかないものとは爺さんと婆さんが話しているのを狼と泥棒が聞いている。「ふるやのもり」が一番おつかないと聞いて、狼が驚く。狼が逃げ出すと、泥棒は馬が逃げたと勘違いする。狼は背中に飛び乗ったのが、「古屋の漏り」と勘違いする。

2、大話 ナンセンスを強調する

へっこき嫁

嫁の屁で人が吹き飛ばされる。梨をもぐ。舟を動かす。

誰なら屁

屁ひりの息子の屁は「だりゃ、だりゃ」と聞こえる。町の長者が泥棒よけに雇う。泥棒が入ると、息子の屁の音と知り、漬けたナスを尻につめ、仕事を始めるが、ナスを踏んづけて大きな音で「だりゃ、だりゃ」と鳴り出して、慌てて逃げ出す。

鴨取りこんべえ

ごんべえが池で鉄砲をうつと、7羽の鴨をうちぬく。岸で寝ていた猪まで撃ち殺す。池に入って鴨を腰紐で縛って岸までもどると、手にさわったものは、ウサギで、ウサギは山芋をほっていたので、芋もついてくる。岸まであがるとふんどしの中に魚がいっぱい入っている。

3、まねそこない

旅学問 (旅先で取り違えて覚えたことばを間違えて使う笑い話)

新潟へ行ってことばを学習する。便所に行く→四国参り 赤い→朱膳朱椀
材木→よいやらさ くれ→くまのやまと手帳に書き付ける

「ばひにのってとおるところ、犬皮にほえられ、馬皮は乱気となって、ようかんばたけにとびこんで、ヨイヤラサに、頭をぶつけられ、あたま、しゅぜんしゅわんと、あいなりそうろう。傷薬一ぶく、ポコンポコン」

そばはたご

いなかの若者がそばをたべることになったが、そばのたべかたをしらない。そば職人がそばをつまみ食いしている姿をみて、尻はしよりをしてつまみ食いをはじめ。はたごの主人がそばの食い方を教えようと、するが芥子にむせて咳き込むとみんなその真似して咳き込む。主人はたまらず階段を駆け下りようとして踏み外す。若者も一斉にその真似して階段からおちる。

4、ことばあそび

昔話の中には、ことば遊びをテーマにしたものが多く見受けられる。

「かかみところとことしゃみせん」(越後宮内昔話集)には、田舎から出て行った男が江戸の「かかみところ」(鏡所つまり鏡店)の看板をみて、「鼻見所」と勘違いして、鼻を見せてくれと行って店に入ってゆく。鏡店の女主人は紅を塗ったり、化粧したりして、男の前に立ち、来年も来るように約束する。翌年、男が江戸へ出て同じ店に行くと「ことしゃみせん」(琴、三味線)の看板を見つめる。男はその看板を「今年や見せん」と読んでしまう。男は、今年鼻見せないのかと納得して帰ってしまう話である。

また「大根撒きの失敗」(長岡市中沢郷土史)では大根の種を撒こうとした男に、「はばかりながらタバコの火を貸してほしい」と近寄ってくる男がいる。「憚

りながら」は失礼ながらほどの意味であろう。それを大根撒きの男は「葉ばかり」と受け取ってしまう。「葉ばかりの大根」など縁起でもない翌日撒くことにして、翌日大根種を撒こうとすると、隣の娘がほっぺたに手を当てて来るので、聞いてみると「歯を虫が食って歯医者へゆく」という。男は「葉を虫が食う」ととり、大根の葉を虫が食うとは、縁起でもないとまた種まきをやめて家に帰ってしまう。次の日、こんどは人が来ないうちに撒いてしまおうとすると、村長が通りかかる。男は村長に昨日、おとといの話をする、村長は「そんな根も葉もないことを」と縁起を担ぐ男を馬鹿にする。そこでまた男は「大根に根も葉もない」とは縁起でもないと思って、とうとう大根の種まきをしないでしまったという話である。

この話も大根の「葉」を「葉ばかり」ととり、根拠もない「ねもはもない」ということばを「根も葉もない」と受け取ってしまう。ことばの行き違いの面白さがネタになっている。

この話は、昨年（平成 18 年）十月、山形県南陽市の「語りフェスティバル」で長崎の人が語ったのにびっくりした。この中の三人の話がそっくりだった。ことばの遊びが昔話の重要なテーマになっているようだ。これが近世の落語に移行していったのではなかろうか。

もう一つ「げんきゅうかづら」（長岡市中沢郷土史）の話もそうである。殿様が重い病気になって、医者から見てもらったら、医者が「げんきゅうかづら」の皮を煎じて飲めば直るといふ。げんきゅうという葛（かづら）の皮という意味だったのである。領主はこの意味がわからず、領内にお触れを出して「げんきゅうかづら」の皮を探すように命じる。領主もこの意味がわからず、和尚に聞いたら、和尚はこれを「玄久がつら（顔）」と取って、村に住む玄久という男のつらの皮を持っていけばという話になる。玄久という男を殿様の所に連れてゆくと、殿様はびっくりする。かくして玄久は顔の皮を剥がれないで済んだといふ、「げんきゅう葛」の皮を玄久が面（つら）の皮と勘違いする話である。

そのほか、「隣の屋敷に出るはな」（三島町東京在住者機関紙「だいろのひとりごと」）は隣の屋敷に枝を延ばした桜の枝を隣家の人折って「隣の屋敷へでる花は折ろうと捻じろうとこっちの好き」といふので、桜の木の持ち主は「よしそれならば」と一計を案じて、夫婦して相撲をとる。隣家の主人が何かと窓から顔を出した、そこを木の持ち主の主人が釘抜きで隣の主人の鼻をはさむ。隣の屋敷にでるはなは折ろうと捻じろうとこっちの好き」といふ語を逆手にとって反撃するので、隣の主人は参ってしまう話である。鼻と花をかけた笑い話である。

こうしてみると、昔話には、同音異義語の駄洒落を楽しんだり、わざと違う意味にとったりして言葉遊びの昔話が多いのに気づく。

5、愚か婿

秋山話

1、里の嫁の家に泊った婿の失敗

茶碗のお湯を冷ますには、沢庵を貰ってかき回すと教えられた婿が風呂の熱いのを冷ますため、沢庵をもらって風呂水をかき回す。

コタツを知らない婿が、猫がコタツにもぐって布団の反対側から飛び出したのを見て、こたつ布団にもぐりこむ。

2、婿の挨拶

嫁の実家に挨拶に行く愚か婿、愚か者がばれないように足に縄をつけ、それを引いたら「さようでございます」というように嫁に知恵をつけられる。はじめはそれで信用されるが、縄に猫がじゃれて「さようでございませう」を連発して婿の愚かさがわかってしまう。

6、艶笑譚

下の口を養え

少し愚かな若者が嫁をもらうが、何日かして嫁が帰ってくる。わけを聴くと、夫が夜の営みをしてくれない。仲人が男をよんで、「嫁は上の口を養うだけではだめだ。下の口を養え」という。男は嫁には下の口があるのかと嫁が寝たときみると口がある。さっそく飯を茶碗に入れて下の口に食べさせようとすると、嫁が屁をこく。男は「吹くな、冷や飯じゃ」という。

鶯の谷渡り

行商人が、旅に出るとき、留守中妻が浮気をしないように、陰部の右に鶯を絵文字で書く。旅から帰ってみると、鶯が左に移っていた。怒って妻を問いただすと、鶯の谷渡りということがあると、とりなす。妻の不貞をみるために、その体に動物、植物の絵や文字を書き、その変化を妻がことばで、言い逃れる。

爺の穴

爺が「婆にある穴はわしの穴だ」という。婆は「わしに開いた穴は、わしのものだ」といって、口論となる。二人は大岡越前に訴えでる。越前守は二人を蔵の中に閉じ込める。爺と婆は退屈して壁をみていると、壁にあいた穴からネズミが出入りする。越前守があらわれ、あの穴はなんの穴かと訪ねる。すると、二人はともに「ネズミの穴」とこたえる。蔵に開いた穴でもネズミが出入りするから爺の穴だといったという。

鬼の子小綱

娘が鬼に攫われる。爺が探しに行き、鬼の子の手引きで鬼の家に行く。隠れていると、鬼が家に帰ってきて、人臭いという。娘と鬼の子の機転で危機を逃

れ、舟で逃げる。おってきた鬼は、海水を飲んで舟を吸い寄せた。鬼の子が母の尻をまくって杓子で叩くと、鬼は笑い出し、海水を吐きだして、無事に逃げ帰る。

卯後家の観音（白鷹町昔話）

仲のいい夫婦がいて、旦那がぼっくり死んでしまった。妻は悲しんで、毎日泣いて暮らしていた。ある時歌を詠む。自分の髪は長くて、旦那は命が短い。「いらぬ私の髪の長さよ」といって髪をバツサリ切ってしまい、尼さんになってしまった。それでもいい女で男たちが寄ってきた。「後家さんは後ろの空き家に住むけれど、前の空き家は誰に貸すらん」と歌を詠みかけてきた。尼さんは「君がため前の空き家の観世音扉を開けて今宵待ちます」と歌を作ったとき。とうびんと（佐藤きく／大正九年生まれ）